

# 静岡への メッセージ

Message to  
SHIZUOKA

漫画家

しりあがり寿 氏

Kotobuki Shiriagari



## 経歴

1958年、静岡市生まれ。1981年、多摩美術大学グラフィックデザイン専攻卒業後、キリンビール株式会社に入社し、パッケージデザイン、広告宣伝等を担当。1985年、単行本『エレキナ春』で漫画家としてデビュー。パロディーを中心とした新しいタイプのギャグマンガ家として注目を浴びる。1994年、独立後は、幻想的あるいは文学的な作品など次々に発表。マンガ家として独自な活動を続ける一方、近年ではエッセイ、映像、ゲーム、アートなど多方に創作の幅を広げている。

## 「NO」と言える静岡人をめざして

ボクは静岡市の駅前、紺屋町の商店街で生まれました。おぐし神社で池の奥を探検したり、駿府公園ではあのヘンなカタチの白いスベリ台（まだありますよね！）で遊んだり、やすらぎの塔の台座によじ登つたり、谷津山では防空壕に潜り込んで叱られたり、静岡での子供時代を満喫しました。いやーホントに楽しかった。

高校を卒業して東京に出たのですが、その時初めて静岡を外から見て、静岡が他と違うところがいろいろ分りました。「クジラ」のイントネーションが違うこと。静岡以外では冬は小学生が長ズボンをはいてるということ。静岡ではどこにでもあつたあの濃いおでんがどこにもないこと。

そして何よりビックリしたのは東京ではね。自分が生きていくためにはヒトとぶつかることがないこと。

ちゃんと「NO」を言わなければならぬ、といふことでした。そう、静岡ではヒトに対し、ほとんど「NO」ということがなかつたのです。それほど静岡ではお互いに相手の気持ちを思いや、ヒトのいやがることはしない。だからあって「NO」と言わなければならぬ場面はほとんどなかつた。

よく静岡の人は人が良いとか言われますが、静岡がおれおれ詐欺の被害者全国」というのも納得ですよね。「オレだよ、息子だよ」と言われたら、静岡の人は怪しんで「アンタがそう言うんなら、そらなあー」「お金がいるんならしょんねえなー」とお金を振り込んでしまうのでしょうか。

おそらく静岡の人は余裕があるんでしようね。自分が生きていくためにはヒトとぶつかること。

なければならぬ、そんな場面が少ないよう  
な気もします。

静岡は温暖で豊かな自然に加え、東海道の要所にあつてどの時代も何らかの政治的拠点があり、仕事も文化も苦勞しないで手に入る。ある意味ホントに地理的に恵まれている土地だと言えるでしょう。でも、近年そんな静岡の地理的な優位性も交通手段の発達、情報通信技術の進歩などによつてじょじよに失われつつあるのかもしれません。

今までの静岡は「そこにある」だけで価値があつた。でもこれから静岡は「そこで何をしているか」が重要になります。では何をすればいいのでしょうか？…これはもう乱暴ですが「自分が好きなことをやる」しかないような気がします。

何年か前、フランスに自分の漫画を売り込みに行つた時、日本的だからと墨絵で描いた漫画を持っていったのですが、向こうが欲しいのはそうじやなくていわゆるオタクというか

アキバ系というかそういうマンガでした。つまり、相手に合せて作られた中途半端な何かよりもホントに自分たちが好きでつづめたものの方が世界では残っていくのだな、とその時思いました。相手が欲しいものよりホントに自分が欲しいものでないと成熟した消費社会では生き残れないのかもしれません。

静岡というのは豊かな土地で、たいていのモノは手に入る、そんな恵まれた人たちが心から欲しいもの、そんなモノやサービスならそれは世界に通用するのかもしれませんよね。

そのためには静岡の人は今までよりちょっとだけ我を張ることが大切になるかもしれません。ヒトに嫌われても空氣を読まなくとも自分の好きなものをつきつめる。周りもそんな人間をあたたかく盛りたててやる。そうすれば何か新しいものが生まれるかもしれない。

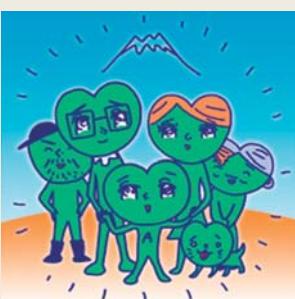
諂いを恐れて自分をまげるのではなく、今こそ静岡人は苦手な「NO」を言うべき時かもしれません。

## 今月の一文字

しりあがり寿さんが選ぶ  
静岡の良さを表現する一文字。

陽

作品のご紹介



静岡市葵区PRキャラクター  
「あおいくん」

あおいくんとその家族は、第1期「葵区区民懇話会」の提案により、葵区出身の漫画家しりあがり寿さんにデザインを依頼して誕生した、区のPRキャラクターです。「あおいくん」の名前は区民からの応募700件の中から選ばれました。